

435
4
361

音訓
假字
訂正
身延山御書

020170-000-2

特14-332

身延山御書

(音訓假字・訂正)

北畠 茂兵衛／編

M22.10

ABH-0385

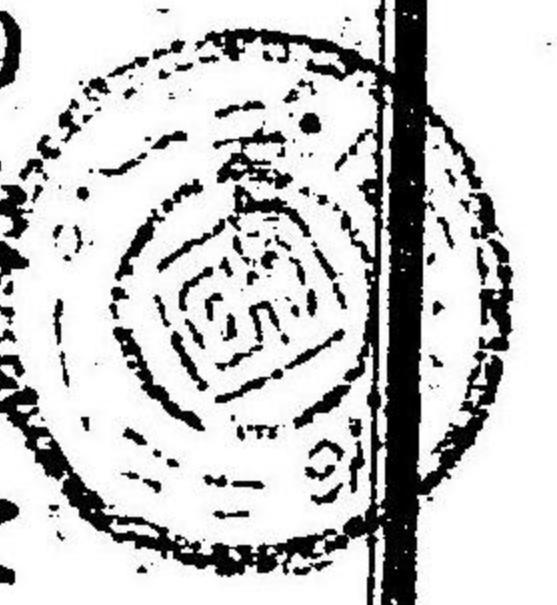


№2090/22



音訓訂正身延山御書

誠まことに身延山みえんざんの栖すまは千早ちば振神ふりかみも惠めぐみを垂たれ天降あまふりりまじま
 すらん無む心こころ賤しんの男をとこ賤しんの女をんなまでも心こころを留とどめべし哀あはれを
 催もよほす秋あきの暮くれには草くさの庵いほりに露つゆ深ふかく檐のきに集あはれ蜘蛛くまの系い玉たま
 を連つらぎ峯ねの紅に葉はいつしか色いろ深ふかしてたえくくに傳つたふ懸かけ
 樋ひの水みづに影かげを移うつせは名なにしおふ龍たつ田た川がはの水みづ上かみも斯かや
 と疑うたがはれぬ又また後うしろるには峨か峨がたる深ふか山やま聳そびて梢こゝろに一いち乗りの
 果このみを結むすび下した枚たに鳴なく蟬せみの音ね滋しく前まへには湯ゆ湯ゆたる流なが水みづ
 湛たへて實じつ相さう眞しん如にの月つき浮うび無な明めい深しん重じゆうの闇やみ晴はれ法ほ性しやうの空そら
 に雲くももあし斯かる砌せきなれば庵いほの内うちには晝ひるは終ひ日りに一いち乗り



妙典の御法を論談じ。夜は竟夜要文誦持の聲のみす。傳
聞釋尊の住給ひけん鷲峰山を我朝此刹に移しおきぬ。
霧立嵐烈しき折々も山に入りて薪をこり露深き草を
分けて深谷に下りて芹を摘み山河の流もはやき岩瀬
に菜をすくぎ袂しをれて干陀る思ひは昔の人丸が詠
じける和歌の浦に藻鹽たれつと世を渡る海士も斯や
と思遣らる。つくくと憂身の有様を案ずるに佛の法
を求め給ひしに異あらず昔釋尊樂法梵志として皮
を剥ぎて紙とし。髓の水を取て硯水とし。肉を割て墨と
し。骨を擢て筆として。下方の迦葉佛に値奉りて。如法は

應に修行すべく非法は行す應からず。今世若後世法を
行ずるもの安穩ならん。此文を傳へ給ふ薩埵王子とし
ては。飢たる虎の爲に身を與へ雪山童子として。半偈
の爲に身をあげ。尸毗大王として。鳩のため肉を秤
にかけ。乞眼婆羅門には眼をくじりて取せ給ひき。又佛
大國の王と御坐し時宿善内に催はし。月卿雲客の政を
もあすれ。百官萬乘に仰がる十善の樂も。風の前の燈わ
だある春の夜の夢籬に。つたふ權華の日影をまづほど
ぞかし。然るに過去の戒善いみじきに依て。今生は大國
の王たりと云ども。無常の殺鬼に誘はれて。一期空しく

して後修する所の善あるは阿鼻大城の炎の底に沈
み。刹利も須陀もかはらぬ例にて三熱の炎にまじはり。
鐵繩五體を縛り三熱の彈丸を口に入れ阿防羅刹三鈷
の菱利を手に取り邪見の音をあらゝかにして五體身
分を取々に責るあらば音を天に響かし叫ぶとも地に
臥して歎くとも百官萬乘も來つて助くる事おし親類
眷屬も來つて救ふことなからん。又錦帳の内にして夜
なくのねさめの床にして天にあらば比翼の鳥地に
住まは連理の枝とあらんと。月日を送り年を重ねて契
りし妻子もゆきて訪ふ事はあらじあんど様々思食つ

とけ給ひて自から藏を開きて金銀等の七珍萬寶を僧
に供養し。象馬妻子を布施し。然して後大法の螺を吹き。
大法の鼓を撃て。四方に法を求め給ふ。阿私仙人と申す
仙人來つて申ける様は實に法を求め給ふ志御座さば。
我いはん様に仕へ給へと云ければ大に悦んで山に入
ては果を拾ひ薪をこり。菜を摘み水を汲み給使し給へ
る事千歳あり常に御口ずさみには情に妙法を存ずる
が故に身心懈倦おかりきとぞ唱へ給ひける。文の心は
常に心に妙法を習んと存ずる間身にも心にも仕ふれ
ども。懶き事なしといへり。如此して習ひ給ひける法は。

即ち妙法蓮華經の五字なり。爾時の王とは今の釋迦牟尼佛是也。佛の仕へ給ひて法を得給ひし事を我朝に五七五七々の句に結び置けり。今如法經の時伽陀に誦する歌に法華經を我得し事は薪こり茶つみ水汲つかへてぞ得し。此歌を見るに今は我身につみしられて哀に覺えけるあり。實に佛になる道は師に仕ふるには不過妙樂大師弘決四に云く。若し弟子有つて師の過を見さば。若は實にも。若は不實にも。其心自ら法の勝利を壊失す。と云々文の心は。若し弟子あて師の過ちを見はさば。若は實にもあれ。若は虚言にもあれ。已に其心有るは身

自ら法の勝利を壊り失ふもの也。と云々又止觀一に云く。如來懇懃に此法を稱歎し給へば。聞者歡喜す。常啼は東に請じ善財は南に求め。藥王は手を燒き。普明は頭を刎らる。一日に三度恒河沙身を捨るとも。尙一句の力を報ずること能はず。况や兩肩に荷負し。百千萬劫すとも。寧ろ佛法之恩を報ぜむや。と云々文の心は。如來懇ろに此法を稱歎し給へば。聞者歡喜す。常啼菩薩は東に法を請ひ。善財菩薩は南に法を求め。藥王菩薩は臂を燒き。普明王は頭を刎られたり。一日に三度恒河の沙の數身を捨るとも。尙一句の法恩を報ずる事能はず。况

や三つの肩に荷ひ負て百千萬劫すとも寧ろ佛法の恩
を報ずる事あるべからずと云へる心也。止觀五に云く。
香城に骨を粉き雪嶺に身を投ぐとも亦何ぞ以て徳を
報ずるに足むやと云へり。弘決四に云く。昔毗摩大國と
云國に狐あり獅子に追れて逃けるが水もあき渴井に
落入りぬ獅子は井を飛越て行きぬ彼の狐井より上ら
んとすれども深き井あれば上る事を得ざりき。既に日
數を経るほどに飢死んとす。其時狐唱へて云く。禍ひあ
る哉。今日苦に逼られて便ち當に命を丘井に没すべし。
一切萬物皆無常なり恨らくは身を以て獅子に飼ざる

ことを。南無歸命十方佛。我心の淨くして已むことなき
を表知したまへ。文文の心は禍なる哉。今日苦にせめら
れて即ち當に命を渴井に没すべし。一切の萬物皆是無
常なり。恨らくは身を獅子に飼ざりける事よ。南無歸命
十方佛。我心の淨きことを表知したまへと喚りき。爾時
に天の帝釋。狐の文を唱ふる事を聞給ひて自ら下界に
下り井の中の狐を取上げ給ひて法を説き給へと宣ひ
ければ狐云く逆ある哉。弟子は上に師は下に居たる事
よと云ければ。諸天笑ひ給へり。帝釋誠にと思食て下に
居給ひて法を説給へと曰ひければ。又狐云く逆なる哉。

師も弟子も同座ある事をと云ければ。帝釋諸天の上の御衣をぬき重ねて高座として登せて法を説しむ。狐説に云く。人あり生を樂ひ死を惡む。人あり死を樂ひ生を惡む。と云く。文の心は。人有りて生を樂つて死せん事をにくみ。又人有りて死せん事を願つて生ん事をにくむ。此文を狐に値て帝釋習ひ給ひて。狐を師として敬ひ給ひけり。天台御釋に云く。雪山は鬼。墮つて偈を請ひ。天帝は畜を拜して師とす。囊臭きをもて其金を捨つる事。あかれと釋し給へり。されば何かに賤き者あり共。實の法を知ららん人を。いるがせにする事あるべからず。然れ

ほ法華經の第八に云く。若は實にもあれ。若は不實にもあれ。此人現世に白癩病を得んと云く。文の心は法華經の行者のとがを。若は實にもあれ。若は不實にもあれ。云ん者は。現世には白癩の病をうけ。後生には無間地獄に墮べしと説れたり。此等の理を思ひ續くるに。大地の上。に鐵を立て。大梵天宮より糸を下して。あやまたず糸を鐵の穴に入る。事は有とも。我等が人間に生る。事は難く。又億々萬劫不可思議劫は過る共。如來の聖教に値奉る事難し。而るに受け難き人間に生をうけ。値がたき聖教に値ひ奉る。設ひ聖教に値ふと云とも。惡知識に値

ふみらは。三惡道に墮ん事疑ひ有べからず。師墮れば弟子墮つ。弟子墮れば檀那墮つと云ふ文有が故に。今幸に一乗の行者に値ひ奉れり。皮を剥ぎ肉を切り。千歳仕へされども。恣に一念三千十界十如一貫中道皆成佛道の妙法を學ぶ。實に過去の宿善拙ふして。末法流布の世に生れ値されば。未來永々を過共解脱の道難かるべし。又世間の人の有様を見るに。口には信心深きことを云へども。實に神にそむる人は千萬人に一人もあし。涅槃經に云く。佛法を信ぜずして惡道に墮せん者は。大地の上の土の如く。佛法を信じて佛に成らん者は。爪上の土の

如しと説給へるも理あり。昔佛摩耶の恩を報じ給はんが爲に。俄かに人にも知られ給はずして。忉利天へ四月十五日に昇らせ給ひて御坐けるに。五天竺の國王大臣を始めとして。あやしの賤の男。賤の女。迄も佛を失ひ奉りて。啼悲しみける歎き限りなく。誠に子を失ひ親に後れたるが如し。いとをしき妻を戀ひ。男を戀ふる思の暗すら忍び難し。何に況や大覺世尊の三十二相八十種好。紫磨金色の粧ひ。嚴しくして。迦陵頻の御音を以て。一切衆生を皆佛に成し給はんと。御經を説せ給ふ。慈悲深重に御坐ます佛の御餘波。惜み進らする歎き思遣るに。上

陽人が上陽宮に閉籠られて歎きしむけきにも勝れ、
王の娘娥皇女英の二人、舜王に別れ奉りて歎きし歎き
にも勝れ、蘇武が胡國に流され十九年雪中に住けむ思
にも勝れり。餘りの御戀しさに木を以て佛の御形を作
り奉るに三十二相の一相をだにも作り似せ奉らず爾
時優填大王と申ける王赤梅檀と云木を以て、物利天よ
り毗首羯摩天を請じて作り奉ける佛、物利天へ本佛の
御迎へに参らせ給ひけるも、優填大王の信心深き故也。
是こそ一閻浮提に佛を作り奉りける始めあれ。又須達
長者と云ける者あり。佛は物利天に御坐が七月十五日

天竺へ下給ふべき由聞えければ、御儲に御堂を作らむ
としけるに、御堂造るべき地を持ざりければ、波斯匿王
の太子、祇陀太子と云ける人、祇陀林と云苑を持給ひた
りけるに、廣さ四十里有ける此苑に、人太刀刀を持ちて
入れば折碎ける苑也。須達、祇陀太子に値ひ奉りて、此苑
賣せ給へ。御堂造らむと云ければ、太子の曰ふ様、此苑四
十里に金を厚さ四寸に敷給はば賣んと曰ひけり。須達
買ふべき由を申ければ、太子曰く、戯にこそ云つれ。實に
は協ふまじと曰ひけり。須達申しけるハ、天子に二言あ
しと云。争でか虚言をし給ふべきと申して、波斯匿王に

此由を申しけり。大王曰く。祇陀太子ハ。我位を繼べき者也。争でか假染の戯れにも虚言をすべきと。仰せられければ。太子力あく賣せ給ふ。須達四十里に金を四寸に敷て。買取て。悦んで御堂を造らんとしけるに。舍利弗來つて。繩を引き地をわりけるに。舍利弗空を見上げて笑ひけり。須達云く。大聖威儀を亂さぐる理也。何かに笑はせ給ふと怪み申ければ。舍利弗云く。汝此堂を造らんとすれば。六欲天に軍起る。かゝる大善根を修する者あれば。我天へこそ迎へむずれとて。互に諍ひを成す事のをかしど覺ゆる也。汝は一期百年の後には。兜卒の内院に生

るべしとぞ宣ひける。然して後ち。此堂作り畢。其名を祇園精舎と云ふ。祇園精舎へ七月十五日の夜。佛入せ給ふべき由有しかば。梵天帝釋。切利天より。金銀水精の三の橋をかけたなりける。中の橋を佛ハ入らせ給ひき。佛の左には梵天。右には帝釋。互ひに天蓋を指かけ進らせ。佛の御後には四衆八部。迦葉迦旃延。目連須菩提。千二百の羅漢。萬二千の聲聞。八萬の菩薩等を引具して下り給ひけるに。五天竺に有と在ゆる人。皆たえくくに隨て油を儲けて燈けり。萬燈をともす人もあり。千燈を燈す人も有。或は百燈。乃至一燈をともす人もありけるに。貧女と云

者ありけり。貧しき事譬ふべき方もあし。身に纏ふ物とては。十府の菅薦にも及ばざる藤の衣計り也。四方に馳回り燈の代を求むるに能はず。空しく歎き思ひつもれる。涙油あらましかば。百千萬燈にともすとも盡じ思の餘りよ自ら髪を切り手づから髪にひねりて。油一燈にかへて。纒にぞ燈したりける。佛神も。三寶も。天神も。地神も。納受を垂れ給ひけるにや。藍風毗藍風と云ふ。大風吹きて燈を吹き消しけるに。貧女が一燈計ぞ残りたりける。此光にて佛は祇園精舎へ入らせ給ひけり。是を以て思ふに。たのしくして。若干の財を布施すとも。信心弱く

は佛に成らん事協ひ難し。縦ひ貧ありとも。信心強く志深からんは。佛に成ん事疑ひ有べからず。されは。無勝徳勝と云ける者は。土の餅を佛に供養したてまつり。此功德に依て閻浮提の主阿育大王と生れて。終に八萬四千の石塔を造り。國々に送り給ひ。後に菩提の素懷をどけ給ふ。されは法華經には。四十餘年が程簡はれたる女人も佛に成り。五逆闍提と云れたる提婆も佛にありけり。然れば。末代濁世の謗法闍提。五逆たる僧も。俗も。尼も。女も。此經にて佛に成事疑ひなし。然れば。法華經第七に云く。我滅度の後に於て。此經を受持すべし。是人佛道に於

て決定して疑ひ有ることおけん。と云云此文こそ世に
 く憑敷候へ。此等の様を思ひつゞけて。觀念の牀の上
 に夢を結べば。妻戀鹿の音に目をさまし。我身の内に三
 諦即一。一心三觀の月雲りあく澄けるを。無明深重の雲
 引覆ひつゝ。昔より今に至るまで。生死の九界に輪る事。
 此砌にしられつゝ。自らかくぞ思ひ連ぬる。

立渡る身の浮雲も晴ぬべし。不絶御法の鷲の山風
 建治元年八月廿一日
 御花押

今回一千部を限りて活字に物せらるゝに。つきて余音

訓假字校訂の仰を受たる偏に唯あらぬ宿世あるを況
 て此御書を手にし。朝昏讀習し。誦記られん。人々の展轉
 隨喜功德をや。斯て上は無涯佛恩に。こたへ下は無極父
 母の恵に報ゆべき。ありがたき善根から。さらめやも

れもへ人百斛餘八十斛の 翠園一如謹誌

乳房のむくい。かきりあき身を

2D-A9

第四長崎清淨結社 貫名氏

爲慈慈慈慈慈慈
慈母父信信信信
信行院院院院院
院妙宗明日照信
宗日了信女士菩
提

明治廿二年十一月十七日亡母三回忌追善の爲に
之を印施す

編輯者 北島茂兵衛
東京市日本橋區通一丁目十五番地

印刷者 島連太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六番地寄留

印刷所 秀英舎
東京市京橋區西紺屋町二十六番地

明治廿二年十月七日印刷
同年同月七日出版